滋賀短期大学研究紀要
第46号　2021年

中国の地域構造についての一考察
―歴史地理学的視点から―

秋山元秀*
滋賀短期大学 学長

An Essay about the Regional Structure of China
― From Viewpoint of Historical Geography―

Motohide AKIYAMA
President, Shiga Junior College

Abstract: (Essay) In this essay I discussed three themes about geography of China and other three big countries by comparing them. (1) Considering the country's area the biggest one in the world is Russia whose area has seventeen million square kilometers. And the second lank countries are Canada, USA and China, all of which have areas of about ten million square kilometers. Although USA and China have same condition in their great area and their natural conditions, they are very different in their history and regional structure. Today as USA and China are two big countries in fierce rivalry for many fields, it is interesting and important to understand the fundamental characters of two countries from historical-geographical viewpoint, which will give some perspective to the geopolitical analysis of two counties. (2) About the regional structure of China I have written some papers, and presented a schematic diagram to understand it. Here I try to explain the contemporary changing regional structure of China using this diagram. (3) After the unification by Qin Shi Emperor China has experienced many times of shift from unified age to divided age. Especially in the frontier zone of the country we can see many transition of national boundaries and ruling ethic groups. To understand such a changing historical-geographical image I produced some historical maps for main stages in Chinese history.

キーワード：歴史地理学（Historical Geography），中国地域構造（Regional Structure of China），比較地域論（Comparative Regional Geography）

１．大きな国

筆者はかねてから中国の歴史地理を研究テーマとし，とくに中国全体の地域構造の歴史的な変化を，統合的にとらえる見方について試論を発表してきた[1)]。その場合の中国とは決して現在の中華人民共

* E-mail: m-akiyama@sumire.ac.jp

和国の国としての範囲をいうのではなく，中華文明圏とか中華世界といった方が適切な中華文明の歴史的な展開をふまえた範囲を指していた。それは国境線などで区分される範囲ではなく，中心には確固とした文明の核があるものの，周辺ではその影響が漠然と広がるような範域まで含め，当然ながら周辺においては他の文明圏の影響も重なるような重層的な構造を意図していた。

そのような観点が必要とされるのは，まず中国の大きさ，それにともなう多様さが，単眼的な視点でははかりきれないという問題がある。中国の面積は（これは現在の中華人民共和国として）960 万㎢，日本の 25 倍にあたる広大な面積をもっている。世界でこれを大きく上回るのはロシア連邦だけであり，ほぼ同程度の面積をもつのがアメリカ合衆国とカナダの 2 国だけである。何となく大きな国だと思っているオーストラリアやブラジルとは 100 万㎢から 200 万㎢の差があるし，インドは遠く及ばない。しかしロシア・アメリカ合衆国・カナダがいずれも「大きな国」だとしても，大きさの中身とでもいうべき国土の特性によって大きさの実態は大きく異なる。

表 1　4大国の面積人口(2020 年推計値)

	面積千ｋ㎡	人口万人	人口密度
ロシア	17,098	14,593	8.9
カナダ	9,985	3,774	4.2
USA	9,834	33,100	36.2
中国	9,600	143,932	153.3

たとえば世界で最大の面積をもつ国家としてロシアは，ウラル山脈から西のヨーロッパロシアには豊かな農地もあり，都市もモスクワ，サンクトペテルブルクなどの大都市があるが，ウラル以東のシベリアから極東では永久凍土のツンドラや針葉樹林のタイガが広がるばかりで，可耕地や集落・都市は極めて限られたところにしかない。ロシアをウラル以西と以東で比べてみれば，全土の面積の 77%が東にあるが，人口は 26%を占めるに過ぎない。人口密度は全体では 8.9 人であるが，東西で分けてみればでいえば西は 27.3 人であるが，東は 2.9 人にすぎない。ロシアにとってウラル以東の土地がどのような意味をもつのかは，歴史地理上の興味深い問題であるが，ロシアの大きさを質的に高めたとはいえないだろう。

ロシアとは条件は異なるが，やはり北半球の北辺に位置するカナダは，ほとんどの国土が北緯 50 度以北にあり，その多くは森林や湖水地帯で集落も耕地もない。人口密度は全国で 4.2 人とロシア東部よりは多いが，オーストラリアの 3.3 人，モンゴルの 2.1 人などとともに，世界の人口密度の最下位に位置する。さらに地域別にみると，人口密度が高いのは南東部のかつてアカディアと呼ばれた最初に植民が行われた一帯で，10 人を超える州は，小さな島にすぎないプリンスエドワードアイランド州（人口密度 24.8 人）やノヴァスコシア州（17.3 人），ニューブランスウィック州（10.5 人）と国の 1/3 の人口が集中し大都市トロントを擁するオンタリオ州（14.7 人）だけである。あとの 6 州および 3 準州は人口密度が最大でもアルバータの 6.4 人で，北部の 3 準州は 0.1 人にも満たず，なかでも北極圏の諸島を含むヌナブト準州は，人口の 80%以上がイヌイット族であるが，人口密度でいえば 0.02 人にすぎない。しかも面積でいえばヌナブト準州はカナダの地方行政領域で最大の面積をもつのである。すなわちカナダは大きな面積をもつ国であるが，内実は単調で広大な寒冷地域なのである。

表 2　アメリカ合衆国の地域区分

2018 年	面積比%	人口比%	人口密度
北東部	7.3	20.4	93.57
中西部	21.4	20.8	32.83
南部	23.5	36.0	51.65
西部	30.7	21.1	23.18

一方アメリカ合衆国は，ロシアやカナダに比べれば自然も人文環境もはるかに多様性に富んでいるが，全国平均の人口密度は 36.2 人，世界の国別のランクでいえば 146 位で，決して人口稠密な国ではない。その国土の広がりから見れば，アメリカ合衆国はアラスカとハワイを除くと，南北は中緯度の北緯 25 度から 50 度，東西が西経 65 度から 125 度，その間にほとんど整形に近い広袤をもっている。これに対し，ロシアは東西がほとんど東半球全体，南北も北緯 40 度から北極圏までの広袤をもち，カナダも高緯度の土地ではあるが，南北は北緯 45 度から北極圏まで，東西は西経 50 度から 140 度までという大きな広袤をもつ。国土の広袤でアメリカ合衆国に近いのは中国であるが，東西は東経 75 度から 135 度とほぼ等しいのに対し，南北は海南島を除けば北緯 20 度から 54 度と，アメリカ合衆国よりは範域が広い。すなわち 4 大国の中ではアメリカ合衆国が他の 3 か国に比べてコンパクトにまとまった広袤をもっていることになる。

アメリカ合衆国を地域区分する方法はいくつもあるが，最も簡便な北東部・中西部・南部・西部という 4 区分法で見ると，人口では北東部，中西部，西部がそれぞれ全国の 20～21%で，南部だけが 36%を占める。また面積の比率でいえば北東部がわずか 7%であるほかは，中西部と南部が 21%，24%とあまり変わらず，西部のみが 31%とやや大きい。すなわち 4 地域の基礎的条件は，北東部が狭い面積にもかかわらず人口においては他の地区と対等であり，南部は人口において他の地域より大きいが面積ではほぼ 1/4 である。このことを反映して人口密度では北東部が突出しており，南部がそれに次ぐが，最も低い西部でも南北アメリカ全体の人口密度(24.2 人)とほぼ同じ程度である。西部や中西部では，州によっては人口密度が 5 人以下のところもあるが(例えばワイオミング 2.28 人，モンタナ 2.64 人など)，いずれもロッキー山脈の山岳地帯で，自然条件によるものと理解できる。

土地利用からみた場合，アメリカ合衆国の農地率は 4 大国では最も高く，森林率も全土の 1/3 に及ぶ。ロシアの農地率は 10%にも満たず，国土の半分は森林である。カナダは農地率が最も低く，森林も寒冷地で森林も育たないところが多いため，それほど多くない。この 2 国は何よりも北半球高緯度に国土を保有するという条件が，他の条件を上まわる。その点でアメリカ合衆国と中国は主として北半球中緯度に位置し，面積もほぼ等しく，南北に寒冷気候帯から亜熱帯的気候帯まで含むという自然条件は他の 2 国と異なり，農業用地になる基盤においては比較的恵まれている。しかしアメリカ合衆国が，東は大西洋，西は太平洋と東西両側を海に面し，西海岸も東海岸も人口集中地域となっているのに対し，中国は海に面するのは東だけで，西は内陸アジアにつながる山地ないし砂漠である。したがって東部海岸から内陸にかけて平野はあるものの，国

表 3　4大国の農地・森林

2018 年	農地率	森林率
ロシア	7.54	49.78
カナダ	4.33	38.70
USA	17.54	33.87
中国	14.37	23.03

土全体から見れば農地率は低く，また森林にもならない高山寒冷地や砂漠乾燥地が多い。ところがこのような自然条件の上に暮らす人口は，中国はアメリカ合衆国のほぼ4倍であり，このことが両国の大きな違いを生み出す要因となっている。表1にみるように，人口密度も4倍になっている。さらに経済力の最も端的な表現であるGDPや，ここにはあげていないが発表されている経済成長率で見れば，国としては中国がアメリカ合衆国に迫りつつあるのは確かであっても，1人当たりの数値ではまだ低い（2018年では1万ドルに達していないのであるが，2020年の推計値ではすでに1万ドルを超えている）。アメリカ合衆国と中国は，基本的な条件において共通する部分がある半面，全く対照的に異なるところがある。その中国の特性はどのように理解すればよいのだろうか。以下ではその点について考えてみたい。

表4 経済力比較

2018年	名目GDP 10億＄	1人当 GDP ＄
USA	20,580	82,918
中国	13,608	9,532

２．現代中国の地域構造

中国をいくつかの地区に分ける方法は多数あるが，ここでは一般に用いられる区分ではなく，歴史的な背景も含めてこれから展開しようとする地域構造論に最も適合する区分を用いる。

本稿では表5および図1に示すように6地区に区分する。

華北地区は華北平原とその周辺を含み，河北・河南・山東・山西・陝西各省に北京・天津の特別市を含める。一般に使われる区分では，山東を華東，河南を華中，陝西を西北に含めるが，ここでは華東という区分はとらない。山東を江蘇とあわせて華東とする場合，東部沿海地区としての共通性を重視するのだが，これは現代になってから生まれた条件で，歴史的には山東は華北の重要な構成員であった。陝西＝関中，河南＝中原に山東を加えて東西の軸線を形成してきたのであって，山東が江南とつながる要素をもつのは大運河が形成されてからである。河南は基本的には黄河中流域，歴史的には中原を構成する地域であり，長江流域と一緒にする区分には従わない。現

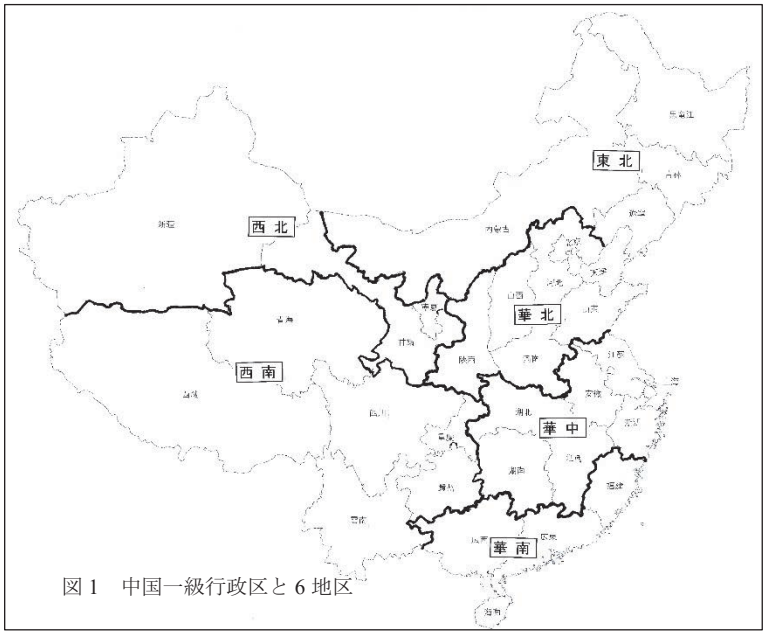

図1　中国一級行政区と6地区

在，陝西は西北地区開発の拠点として西北地区に含めるが，上述のように陝西中部は長安を擁する関中として歴史的には中核地域を形成してきた地域で，華北に加えるのが適切である。山西は大行山脈の西，黄河の東，汾河流域を軸にした黄土高原の東端を占めるが，歴史的には北方から非漢民族が侵入する場合の経路になり，その活動拠点が置かれたり，宗教上の要地となったりした。陝西が南部の渭水流域は関中として重要な役割を果たしたが，北部の陝北は黄土高原やオルドスの沙漠で，歴史的な要地とはならなかったのとは対照的である。

華中地区は現代では一般に華東と呼ばれる江蘇・安徽・浙江・江西各省と上海特別市に，狭義で華中とされる湖南・湖北両省を加える。長江中下流域の広大な沖積平野を擁する地区であり，歴史的には江浙，湖広などと呼ばれ，もっとも豊かな農業生産力に恵まれた地域である。

華南地区は広東・福建・海南 3 省と広西壮族自治区からなる。広西は非漢民族である壮族が多数を占め，その西部は西南地区に連続する山岳地帯であるが，広東に河口をもつ珠江の支流西江の流域であり，両広として一つのまとまりでとらえられている。福建は東南海岸に沿っていて，広義の越（粤）の一角として北の浙江とのつながりもあるが，閩粤という呼称で広東とのまとまりが示されているので，福建は華南に属するのが妥当であると考えた。

華南地区は，広東省，福建省とも改革開放期に経済特区が設置された地区で，全国で技術革新が最も進んだ地区であり，現在では中華世界の中核地区として華南の名称にふさわしいが，歴史的には南越・越南など，越の世界の南端にあたり，他の辺境地区を西北，東北，西南と呼んでいることからすれば，歴史的には東南地区と呼ぶ方が適当かもしれない。

東北地区を構成するのは一般には遼寧・吉林・黒竜江の東北三省であるが，ここでは内蒙古自治区を加える。内蒙古自治区を華北に加える区分もあるが，本来辺境の非漢民族地域である内蒙古を河北や山西とおなじ華北に加えるのは妥当ではないと考える。内蒙古を独立した北方地区とすることも一案であるが，現代中国にも通じる地域区分としては内蒙古自治区だけを独立させる区分は無理がある。歴史的には北方から東北にかけて跳梁した非漢民族は北方異民族という名称で呼ばれることが一般的で，その時には東北平原から大興安嶺山脈を越えてモンゴル高原に及ぶ広い範囲を活動域としており，その意味では東北と北方をあわせる区分には歴史的な妥当性がある。

西北地区は甘粛省と寧夏回族自治区，新疆ウイグル自治区の 2 自治区からなる。前述のように陝西を西北の入り口として西北に含める区分もあるが，地域区分としては陝西を西北とするのは適切ではない。また青海を西北とする区分が一般的であるが，もともと青海はチベットの一部であり，西蔵自治区と別に区分するのは適切ではないと考える。青海の開発は甘粛から入る交通路によって進められており，青海を西北の延長にあるとするのは経済関係を重視する見方からすれば妥当性があるが，自然地勢と歴史条件からすれば，青蔵高原という枠組みで区分するほうが適切である。西北は甘粛から新疆まで，北のモンゴル高原と南の青蔵高原の北壁にあたる祁連山脈に挟まれた狭い回廊状の地勢によって中央アジア（東西トルキスタン）とを結ぶ地区であり，中華世界の国際性を保証する地区でも

ある。寧夏回族自治区はもともと甘粛省の一部であったが，回族が多数居住していることをもって自治区としたもので，地理的な位置づけとしては甘粛と同じである

西南地区は6地区の中で最も広い面積をもつ地区であるが，その内部には3地区に準ずる地域的まとまりがある。まずあげられるのは，地勢としては青蔵高原，民族的にはチベット系民族の居住地である西蔵自治区・青海省と四川省の西部である。平均しても3000m～4000mの高度をもち，国土の最高所にあたる。当然ながら人の居住できる空間は限られている。次に雲南・貴州両省は雲貴高原と呼ばれる高原に，多種多様な非漢民族が，生きた民族博物館といわれるように，それぞれの生活様式をもった居住空間を維持している。西南地区の民族世界は，国境を越えて東南アジアの民族世界と連続する。第三の地域は四川と重慶（ここでは合わせて四川とする），歴史的に言えば巴蜀の境域である。西南地区への入り口としての四川という位置づけでは，西北に対する陝西のように地区の一部としない区分もありうる。四川は三国時代の蜀のように，中国全土を三分した時の一分になりうる十分な地域力をもっている。しかし四川の西部山地は民族世界でいえばチベットの一部であり，漢民族の世界としての四川は地勢的には四川盆地に限られる。この実態を踏まえて四川は西南に含める。

この6地区を基本的なデータで比較したのが表5であるが，これをアメリカ合衆国の4地区の比較と比べると，前節で指摘した両国の相違が明らかになる。

表5　中国地区比較

2018年	面積比%	人口比%	人口密度	GDP比%	1人当元
華北	9.40	27.54	408	27.43	68,323
華中	9.55	28.73	419	33.81	80,726
華南	6.03	14.69	340	17.30	80,791
東北	20.75	10.07	68	8.09	55,161
西北	22.13	4.02	25	2.64	45,086
西南	32.14	14.95	65	10.72	49,213
(四川)	(5.96)	(8.19)	(192)	(6.67)	(55,865)

まず6地区のうち，華北・華中・華南の3地区と，東北・西北・西南の3地区の明らかな違いである。前者はそれぞれ面積比では10%未満であるが，後者はそれぞれ20%から30%を占める。西南から四川（重慶を含む）の面積を除いても6地区中最大である。しかし人口比でみると，前者は70%を占めるのに対して，後者はあわせて30%，前述のように西南から人口稠密な四川を除けば20%未満にすぎない。前者を中華の核心地区，後者を辺境地区というなら，両者の間の格差は非常に大きいといわざるを得ない。それを端的に表すのが人口密度であり，GDP比，また1人当たりのGDP額である。とくに辺境の中でも西北地区の格差が大きい。西南も四川を除くと1人当たりのGDPは4,1138元であり，西北より低くなる。東北が辺境の中では比較的高い値になっているのに対し，西南・西北の低さが際立っている。

アメリカ合衆国では4地区間に中国のような大きな格差はなく，核心地区と辺境地区というような構造は見られなかった。アメリカ合衆国の歴史においては，東部から開発が始まり，西部に向けて開発がすすめられるとともに，西部＝フロンティアとして，辺境が西へ移動していくという歴史理論が

つくられた。では中国の核心＝辺境という構造はどのようにして生まれてきたのか，これには歴史的な検討が不可欠である。

３．歴史的地域構造論

図 2 は筆者がかつて発表した中国の地域構造にかかわる模式図を一部修正したものである。東アジアの歴史的世界を，中華文明を中心に展開してきたものとしてとらえ，その空間的展開とそこに生み出された地域的特性を一覧できるようにと考えたものである。

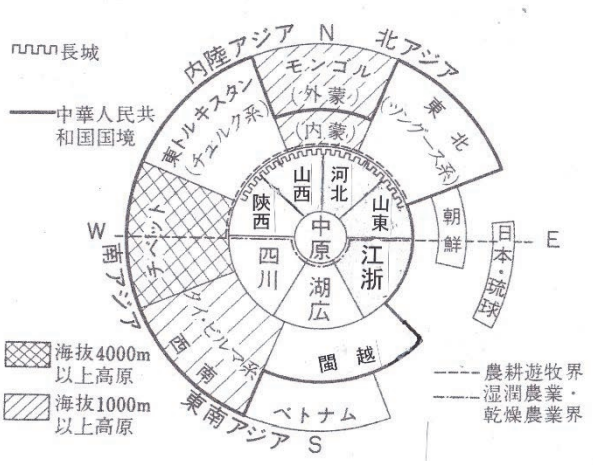

図 2　中華世界の構造模式図

東アジアは自然からみて一つのまとまった世界としてとらえやすい地勢をもっている。西南方はヒマラヤ山脈で画され，その南への延長が西南地区の山地を構成する。ヒマラヤ山脈の北端のパミール高原から東北に伸びる天山山脈は，モンゴル高原の西縁をなすアルタイ山脈へつながり，シベリア南縁のヤブロノヴィ・スタノヴォイ山脈を経てオホーツク海に至る。このようにユーラシア大陸の東南部は，西南から時計回りに東北にかけて走る明確な自然の障壁で区切られている。そして東北から西南に向けては海洋が広がり，東北の一角からは朝鮮半島が突き出し，その先にサハリンから始まり，日本列島，琉球列島を経て台湾に至る島嶼群が並んでいる。現代の国家としては，大陸の大部分が中華人民共和国であり，北方の高原地帯にモンゴルが，さらにロシアのシベリア南部，極東地域が含まれる。半島は韓国と北朝鮮に分かれ，島嶼部はサハリンと台湾を除いて日本が占有する。

歴史的にみれば東アジアにおいて最初に農業文化をともなう文明世界を形成したのが中国であったことは疑いない。いわゆる黄河文明であり，黄河の中下流域，上図で示す中原とその東西にある陝西，山東がその文化がもっとも濃密に展開した地域である。しかし最近は長江流域でも，大規模な稲作農耕の痕跡が明らかになった浙江の河姆渡遺跡や，奇抜な仮面が大量に出た四川の三星堆遺跡などが発見され，黄河文明とは別系統の長江文明として認められており，上図でいうなら中原とその周辺すべての地域が，のちの中華文明を形成する基盤になったと見るのが適切であろう。それに続いて夏殷周三代から春秋戦国期にかけて中心となったのがほぼ現在の河南省にあたる中原であった。西方の陝西地方を出自とする勢力はその中心を渭水盆地，のちの咸陽や長安が置かれた地点に都城を設けることもあったが，中華の中心は，王城の地としての中原，さらにその中核となる後の洛陽の位置であった。

中原を中心とし，その周辺に同心円の一次圏を設定したのが，山東以下の北部 4 地区，江浙以下の

南部3地区である。山東・河北・山西・陝西は現在の省と名称は同じであるが，それぞれの歴史的背景を踏まえた境域である。中原と併せて図1で示した華北にあたる。江浙は江蘇と浙江，それに江西・安徽を加えたもの。江南という言い方もほぼ同じである。湖広は湖北・湖南両省のこと。江浙と湖広を合わせて図1で示した華中の範囲に等しい。四川は現在の四川省と重慶市を合わせたもの，歴史的な呼称でいえば巴蜀である。すなわち現在の四川省は西部にチベット高原の一部を含んでいるが，一次圏域としては豊かな農業生産に恵まれている四川盆地を念頭に置いている。四川盆地は三国志を持ち出すまでもなく，歴史的に独特の役割を果たしているが，その独立性は他の地区よりも非常に高い。

この一次圏の外に設定しているのが二次圏である。二次圏は基本的に非漢民族の生存圏であり，一次圏を内地とするなら，二次圏は辺境地帯である。生活様式も一次圏のような農業ではない。乾燥地域の遊牧，高山地帯の粗放的な農業と遊牧，あるいは農業がおこなわれても，乾燥地域の中に点在するオアシスでの灌漑農業である。この二次圏は南と東南を除いてほぼ8分1ずつに区分できる。まず西方はチベット高原（青蔵高原）という隔絶された地勢のもとでチベット族がほとんど孤立してつくりあげた世界が存在する。

西北は内陸では唯一，外界への交通路が設けられやすい低平な地勢をもっており，早くから中央アジアとの交易路であるシルクロードが通過していた地域である。中国史の用語としては西域といった地域である。気候は厳しい乾燥気候で，新疆ウイグル自治区の大部分を占めるタリム盆地にはわずかな降水量をもつ砂漠が広がる。民族としてはモンゴル高原に出自をもつウイグル族，カザフ族，キルギス族など，チュルク系民族の世界である。このチュルク系民族が広く中央アジアに展開し，その最西端が小アジアからバルカン半島に拠点を確立したオスマントルコ帝国をつくることになる。これらの民族は，宗教としてはイスラーム教を信奉するようになり，中央アジアでは中世にイスラーム化とチュルク化が進み，新疆以西はチュルク系民族の土地という意味からトルキスタンと称する。西北のもう一つの構成員である甘粛の東部は，陝西の延長としての性格をもつが，西部は河西回廊として西域と内地をつなぐ通路であった。ある時代には漢民族の王朝の支配下に入ったが，別の時代にはチュルク系民族やチベット系民族が王朝をつくったこともあった。寧夏はもともと甘粛の一部であったが，移住した回族が多数になったため自治区となったものである。

北方はモンゴル高原で，現在は中国の一部としての内蒙古とモンゴル国（外蒙）に分かれているが，歴史的には常に強力な北方非漢民族が活動する空間であった。モンゴル高原はユーラシア東部でさまざまな民族が生み出される源泉のようなところで，ここから西へ広がったのがチュルク系民族で，東に広がったのが次にのべる東北地区を活動の舞台にしたツングース系民族である。

東北は大興安嶺山脈でモンゴル高原と区分され，東北平原を中心に地勢的にまとまった地区である。現在は南部の遼寧から吉林にかけての地域は，経済や人口では一次圏と変わらない力をもっているが，吉林の辺境や黒竜江はまだ開発途上地区である。歴史的にはツングース系民族が遊牧生活を行っていた地域で，その中から古くは渤海，高句麗などの王朝が生まれたし，新しい時代には契丹族の遼，女

真族の金など，中原の漢民族の王朝と拮抗する実力をもった王朝が生まれ，前近代最後の王朝は東北から生まれた満洲族の清朝であった。

図２に示す西南は，図１の区分の西南について説明した際に，チベットと四川を除いた雲南・貴州の高原地区の実態について言及したが，その独特のまとまりをもつ民族世界である。とくに雲南は東南アジアの大河川の源流地域であり，ミャンマー，ラオス，ベトナムと長い国境で接しているが，お互いに共通する民族文化をもつ。

南方と東南の方角は明確に分けにくい地区である。ここでは合わせて閩越(粤)としておく。福建と広東・広西の両広地区であるが，ほかの二次圏とは異なり，現在は非漢民族が主たる構成員ではない。しかし広西は壮族自治区となっているように，もともとは非漢民族の居住空間であったことは間違いない。歴史的には広州に都を置いた南越国などをイメージすればよい。浙江から南は山越，百越などと呼ばれていた越族の居住地であり，それが歴史の経過とともに漢民族に同化させられていったものである。ベトナムも早くから中国の王朝の支配を受けていたし，言語や文化においても漢文化の影響が大きい。しかし民族自立の意識が高く，中華世界の辺境としてはもっとも巧妙な自立を成し遂げた地区であるといってよいだろう。閩越の広東が，北京政府の意向に反して独自の路線を歩もうとする気配が見える時があるが，それは南方地区のもつ遺伝子なのかもしれない。その意味では香港が自立の方向を強く持つのも当然であろう。

以上，内陸の二次圏について説明してきたが，残るのが東方の海洋である。これまで説明した空間構造からもわかるように，中華世界の中核をなす中原は，海に面する窓をもたない。南方は海に面し，それが上述の自立性，開放性の涵養につながったのであろうが，北の一次圏で海に面するのは山東だけである。実際，山東には徐福伝説のように東海に進出したという痕跡はあるが，それが中華世界の基本的性格に何かを付け加えたとは認められない。

そのかわりに東方の世界に存在するのが半島と島嶼である。朝鮮半島は古い時代には中国の王朝の支配を受けたことがあるが，基本的には独立した王朝を維持してきた。しかし半島は付け根を大陸に持っているだけに，大陸の影響から逃れにくい。実際，朝鮮半島の王朝は中国の王朝の正朔を奉ずるのが常であったし，王の即位にも中国王朝の認可が必要であった。一方で中国に距離を置きたいと思いながら，その高度な文明には服さざるを得ないし，間違いなく憧憬の対象であるというアンビバレントな感情が今でも濃厚に見られるのではなかろうか。

これに対して島嶼国家の日本は，中国と一衣帯水などと言いながらも，適当に距離を置くことを巧みに実現してきたといえるだろう。イギリスが島国であるといってもヨーロッパとの距離をとることが難しいことから見れば，日本と中国の関係は，イギリスとヨーロッパの関係に比べれば，はるかに選択的な距離を取りやすい関係であったといえる。

琉球列島の文化は，歴史的には日本文化の延長に成立したものであるが，中世以来，政治的には独立した勢力として存在し，近世に日本の薩摩の支配を受けながらも，中国に朝貢関係をもち続けた点

で，中国により近い関係をもった島嶼世界であったといえよう。さらに台湾については，琉球とともに本土に従属する位置にあったが，独立する政治力を形成することなく，西欧勢力が占拠したり，中国王朝に対抗する勢力の拠点になったりで，単独で一つの島嶼世界を構成するのは近代以降である[2)]。

中華世界の構造は，以上に述べたとおり，中核としての中原を中心とする同心円的構造として説明できる。中原の周辺に位置づけられる一次圏いわば内圏は，歴史的にもおおむね中国の王朝の支配のもとにあった境域であるのに対し，その外の二次圏いわば外圏は辺境であり，本来は非漢民族の居住する地域として，それぞれの民族世界が展開しており，それが内圏の中国の王朝と敵対関係になって抗争を繰り広げることもあれば，異なる文化を認識しあいながら友好関係を築き，交易によって相互に豊かな繁栄を得たこともあった。このような辺境は，伝統的な観念では夷狄と呼ばれ，東西南北方向に東夷・南蛮・西戎・北狄などと呼ばれる異民族を機械的に配置する考えからもあるが，実際の辺境に展開した民族はもっと多様で複雑である。本稿では 8 等分のそれぞれ一片を辺境民族世界にあててみたが，かなり実態に適合していると思う。それを確かめるために，最初の中国統一が実現した秦と前漢(図 3)，それに辺境が独立したり，辺境の勢力が中原を占有したりした南宋の時代の境域(図 4)をこの図式上に描いたものを示す。いずれも図 2 で示した地域構造が歴史的にも基本的に機能していることがわかる。

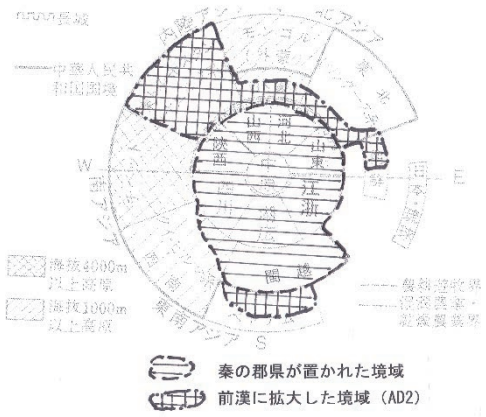

図 3　秦と前漢の境域

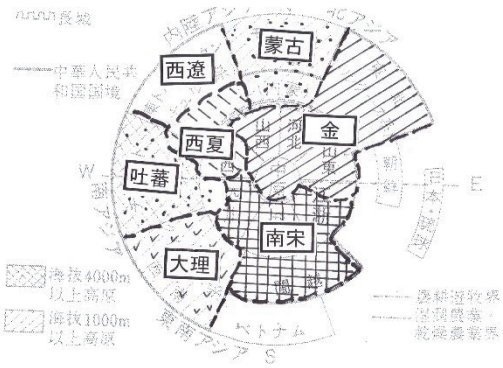

図 4　南宋時代の境域(12 世紀初期)

注

1) 秋山元秀（1984）: 西北―新疆・北部内陸地，木内信三編『世界地理　第 2 巻　東アジア』朝倉書店，同（1995）: 中国総論，河野通博編『新訂世界地誌ゼミナール 1　東アジア』大明堂など。

2) 平松茂雄氏は『中国はいかに国境を書き換えてきたか』草思社(2011)で，本図を引用しながら台湾を付け加えておられる。現在の国際情勢としては台湾を中国とは別に描くことが妥当であるが，本図はもともと歴史地理的考察の結果として描いているので台湾はとくに描いていいなかったことをことわっておく。